

<第3分科会>『関係人口の作り方』

第2部

司会：これより第3分科会、関係人口の作り方の第2部を開会します。開会に先立ち、本分科会のコーディネーター並びに発表団体をご紹介します。本分科会のコーディネーターは、ソトコト編集長指出一正先生です。上智大学法学部国際関係法学科卒業。雑誌 Outdoor 編集部・Rod and Reel 編集長を経て、現職に就任しておられます。島根県しまコトアカデミーメイン講師、静岡県『地域のお店』デザイン表彰 審査委員長、和歌山県田辺市たなコトアカデミーメイン講師、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部、わくわく地方生活実現会議委員、総務省過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会委員などを歴任しておられます。続きまして、発表団体をご紹介します。山形県長井市長内谷重治様より、みんなで創るしあわせに暮らせるまち長井、地域連携の関係人口創出拡大の取り組み。愛媛県西条市長玉井敏久様より LOVE SAIJO なファンづくり。以上、二事例を発表いただきます。それでは、指出先生。分科会の進行をよろしく願いいたします。

ソトコト編集長

指出 一正

皆さん、こんにちは。ソトコトという未来をつくる SDGs マガジンの編集長の指出と申します。今回、第3分科会第2部、関係人口の作り方にお越しいただき、ありがとうございます。これから関係人口について理解、そしてなるほどという色々な事を共有できればと思っています。今回は、初めに流れを説明しますと、まず私の方からコーディネーターとしてのプレゼンテーションで、関係人口の今をお伝えできればと思っています。その後は山形県長井市の内谷市長、そして、愛媛県西条市の玉井市長にご登場いただき、それぞれの市の取り組みについてそれぞれ10分間ほどお話させていただきます。その後は、意見交換になりますので、実際にチャット欄を使って感想や質問を書いていたいただいたものを受け付けますが、発言も可能ですので、チャットに書き込んでいただいたら、順次皆さんにお声がけします。

では、僕の方から関係人口の話を少しさせてください。ソトコトの関係人口の作り方ということで、お話を進めていきます。(1、2頁)

ソトコトは、1999年に創刊したこのような雑誌が母体となっており、関係人口もそうです。そして、色々なローカルに興味がある皆さんや、まちづくり・地域づくりに取り組んでいる20代30代40代の方に特に支持していただいているメディアです。(3頁)

オンラインの方も、今大きく育って月間で 311 万 PV、月間で 113 万ユニークユーザーを達成するなど広くファンが増えています。そして関係人口を作ったり、またサステナビリティを考えたり、町の楽しさを伝えるような講座のお手伝いや監修もしています。(4 頁)

これは、今年 10 期目になった島根県の「しまコトアカデミー」、こちらのメイン講師を務めて今度 4 期目に入ります。「たなコトアカデミー」で田辺市の講座などの設計や講座のメイン講師を務めています。(5 頁)

このように、より広い概念の SDGs を伝えるようなツアーの監修も行っています。環境省から依頼を頂いています。(6 頁)

そして奈良県の奥大和エリアを舞台にした、サステナブルデザインスクールという地域循環を考える若い人たちに受けてもらう講座なども奈良県庁とご一緒しています。このような講座を行いたいという皆さんがいらっしゃいましたら、いつでも僕に申し付けてください。楽しい講座を作りますので、よろしくお願ひします。(7、8 頁)

映像のプロジェクトもやっています。関係人口サミット奥大和で会いましょうといったものも作っています。(10 頁)

メンバーです。最近、特に今年は山形県の小国町と始めた「白い森サステナブルデザインスクール」という、若い人たちが地域の資源を見つけて、地元の営みから学ぶ講座のお手伝いをしています。素敵な笑顔や素敵な風景、小国の風景と東京からやって来た若い 15 名ほどの皆さんです。(11 頁)

山形の金山町とは、金山の時間をデザインするというスクールを行っています。特にこれはオンラインで開かれています、デザインが好きなクリエイティブな若い皆さんが東京に集まって一緒に金山町という場所を学んでいく講座です。(12、13 頁)

こちらは、山形のアルカディア観光局から依頼頂いたライク・ア・バード okitama という置賜地方を舞台にした映像によって関係人口が増えていくプロジェクトです。これは、長井市内谷市長をはじめとするアルカディア観光局の皆さんから依頼を受けて進めています。現代のイザベラ・バードと言える女性が、置賜の素敵な暮らしを営んでいる女性に出会う、女性が女性に出会うことを通じて、自分の生き方や町に対する気持ちのようなことからお話を広げていくプロジェクトです。((14、15 頁)

奥大和で会いましょうというプロジェクトです。北陸農政局から依頼いただいて、若い農

業に興味がある学生の皆さんから、70代80代の先輩世代の生産者の皆さんをつなげる「たがやすラボ」というプラットフォームを作らせていただき、これが今年から始まっています。(16頁～19頁)

関係人口とは一体何だろうという所からお話をしましょう。関係人口とは、観光以上移住未満の第3の人口と言われますが、関係人口の皆が何を行っていくのかという所は皆さんも興味があると思います。(20頁～33頁)

例えばこちら、和歌山県の田辺市とソトコトが一緒している「たなコトアカデミー」という関係人口の講座を見ていくと、受講生の皆が田辺市を大好きになって、田辺のことを想ってトップページのビジュアルを作ってくれたりしています。(34、35頁)

地元にはワーケーションの制度を使用しながら、田辺市を訪れては田辺の皆さんと一緒に交流を深めていきます。田辺営業室の鍋屋さんと森口さんが手前に写っています。(36頁)

田辺市は、未来塾という地元の20代30代40代の素敵な若い人たちが町の未来をあれこれ考えるレッスンをずっと続けています。そういう皆さんと出会うことで関係人口が生まれ、増えていきます。つまり、同じような気持ちを持つ若い世代が、関係人口を迎え入れる町にいるかどうか結構大きい所です。(37頁)

田辺市の場合は、こうして若い人たちを生産者の皆さんで受け入れ、地元の新聞社が理解を示しこのような記事を作ってくれたりすると、関係人口の皆さんが更に笑顔になってどんどん関わっていくわけで、自発的に田辺のことを考えてホームページを作ってくれたり、Facebook ページを作ってくれたりしています。(38頁～43頁)

さらには、生産者の皆さんと一緒に東京のファーマーズマーケットで出店を定期的に出すようになりました。これは関係人口の1つの例かもしれませんが、地域には移住していないけれども東京から田辺のみんなのことを考えて、田辺のプロジェクトと一緒に進めていくという好循環が生まれました。(44、45頁)

次、奈良県の下北山村で起きた関係人口の経年を説明したいと思います。(46頁)

元々、島根県で2012年に始まった「しまコトアカデミー」という関係人口の講座は今10年を迎えて卒業生が300人程出ており、コミュニティとしては600名程度ですが、地域との関わりを首都圏から感じる人たちを生み出す講座をという依頼を受けて作っています。(47頁、48頁)

奈良県の下北山村は、人口 800 人ほどで南村長から連絡を頂いて「むらコトアカデミー」という関係人口をつくる講座を作っています。こちらは、受講してくれる東京の皆さんに、ここが下北山村のこうした場所ですといった事を話すのではなく、自然に、例えばこの池が御神体の池神社を見てもらう等の案内をしています。(49 頁～51 頁)

まだ鬼の末えい・子孫が暮らしている前鬼という集落に行き、鬼の子孫の五鬼助さんという方に会い、家系図を見ると、初代 66 代続く宿郷のご主人の初代は 147 歳までご存命、その他 131 歳、115 歳までご存命といった家系図を見て非常に驚くわけです。そして下北山村という初めて訪れた場所という情報量が少ない所と意識的に出会うと、私が見つけた地域・下北山村という気持ちになります。(52 頁、53 頁)

私が見つけた地域ということを私は大事にしています。自分が見つけた場所に対する愛情を多く持つことが、実は関係人口が増えていく上で大事な所だと思います。私が見つけた長井市だ、私が見つけた西条市と感じ、関係人口が増えていくことが自然で大事なことで、関わりをどんどん深めていく皆さんがこうして地元の方々と協働していき、下北山村に対して自分は何ができるのかと自分事として村を考えていきます。(54 頁～57 頁)

ここまでは、若い人たちの成長していく姿です。首都圏や大都市の若い人たちが、村という存在に触れることで自分自身を成長させるというとても良い話なのですが、これだけではなく、大切なことは地域や村にいる人たちの変化も大事だと考えています。(58 頁)

こうして関係人口の皆さんが訪れるようになると、村の皆さんもなんとなく関係人口のことを考えてくれるようになります。すると、2、3 週間村に滞在する若い人たちのことを考えて、少しゆっくり泊まれる場所が必要ではないかとの配慮から、下北山村では年間で 3 棟、3 ヶ所ゲストハウスを造ってくれる方々が現れました。村に泊まりやすくなって、村の皆さんは働き盛りの若い人たちがしっかり働けるようにと、ワーケーションという言葉の前に造られたこのコワーキングスペースに、東京や大阪や京都や奈良の市街地から若い人たちが現れてここで仕事をするようになり、夜が変わっていきます。(59 頁～61 頁)

夜は、村長を囲んで皆さんで食事する。すると話題は当然村のことになり、南村長が何を考えながら村をつくっているかを皆さんが聞くことで、まちづくりや地域づくりが大変身近なものになってきます。これも大切な視点だと思います。大学生が関係人口の講座を卒業した後に NPO を作り、こうした場所を村の方々と共同で体験できる施設を作ってくれました。(62 頁～64 頁)

さらに受講生、関係人口の1人の女性が村に移り住んで、宿泊型の転地療養サービスをつくってくれました。東京で暮らしていると若い人たちはしんどいことが多く、心が参ってこの後どう生きるかなど悩んでいる時に下北山村にやって来て、村でしばらく静養して、改めて自分が行くべき道、自分がしたい暮らしを考えてもらおうというサービスをつくってくれました。「ムラカラ」といって今2年目くらいですが大人気で、本当に若い人たちから需要があると思います。これをつくってくれたのが、真ん中の森田沙耶さんという、先ほどの「むらコトアカデミー」の卒業生です。関係人口の階段を上っていく中で村と出会い、村を見つけ、村の人たちと関係性を深めていき、仕事を生み出しました。関係人口は、移住するまでがゴールなのか、関係人口から移住者が出てくることが目的なのか、色々な議論があります。地域との関わりを深めていくことで、そこに仕事が生まれたり、柔らかいコミュニケーションが生まれたり等、多様な関係性があることが関係人口の一番の良さだと思います。ですので、目的を1つに絞らないことも大事かもしれません。(65頁、66頁)

最近の話ですが、奈良県でスナックを運営しています。スナックはなぜ良いかというと、人と人との関係を案内する、地元の人たちと出会いやすい場所です、これを「関係案内所」と呼んでいます。こちらも造語ですが、非常に大事にされている言葉です。観光案内所ではなく、人と人との関係を案内する場所をMIND TRAIL といっている奈良県主催の芸術祭。これは奈良県や天川村、曾爾村、吉野町の皆さんが作っている芸術祭で、今スナックを運営しています。(67頁～71頁)

若い人から地元の林業関係の偉い人まで色々な方がやって来ます。その中で出会いが生まれ、アートイベントにやって来たのにいつの間にか林業に関わるようになる等、新しい出会いをつくる場所としての関係案内所が町や村や市にあるかどうかというのは大事な視点だと思います。関係人口を語る上で、こうした場所があるかどうか非常に大切です。(72頁)

最近の関係人口の動向をお話しします。「流域関係人口」と言います。(73頁)

川沿いにコミュニティがあり、それぞれのコミュニティで若い人たち同士が連携していることを最上川流域の若い人たちが教えてくれました。鮭川村や真室川、新庄の若い皆さんが緩やかに連携を取ってまちづくりや地域づくりしている姿を見て、関係人口の中でも新しい流域関係人口と名付けました。筑後川や江の川、吉野川でも流域関係人口が広がっています。色々な方々が連携を取って自分たちの町を盛り上げながら、他の町のイベントの際には手伝いに行くという流域関係人口。川は、元々ハイウェイです。お互いの文化が1番近い所で連なり合っている流域というのを改めて見直すタイミングに来ているかもしれません。(74頁～91頁)

そして「地域内関係人口」。これは、コロナ禍で生まれた関係人口です。(92 頁)

東北への移動の制限がある中で、実は隣町にリノベーションで意見が合う仲間がいた、これを地域内関係人口と呼んでいます。同じ県内の中でも、市・町の中で関係人口が生まれることも大事です。そしてコロナ禍で制限をされるなかで一番進んだ仕組みがオンラインだと思いますが、「オンライン関係人口」というのもどんどん深まりを広げていっています。オンライン上でできることは、コミュニケーションやその場所と仲間になる等、また、いつかそこに行ってみたいという感情が芽生える、そうしたこともとても大事で、それが進化していきました。オンライン上なら安心して仲間になれるというタイプの人もあります。年配の世代の人、移動が難しいフェーズの人、そうした皆さんが関係人口になるという意味では、関係人口の拡大が今回広がったのではと思います。(93 頁～103 頁)

そのような中、秋田県の湯沢市の湯沢ローカルアカデミーという講座の中から生まれたプロジェクトで、湯沢に行ったことがない東京や大阪の男の子や女の子が、湯沢のことを想ってクラフトビールを作りました。110 名以上の方がクラウドファンディングに参加して 70 万から 80 万くらいのお金が集まり、秋田湯沢のリンゴ農家さんを助けるプロジェクトとして、このクラフトビールが生まれました。その場所に行ったことが一度もない人でも、その町の関係人口になるという、大変スピード感のある現象が起きています。(104 頁、105 頁)

最後に、関係人口とは一体どのようなものだろうというのを 4 箇条でまとめてきました。関係人口が作られる過程として、どのようなものがあると関係人口が生まれるのかということです。まず関係案内所が皆さんの地域にあるかどうかです。人と人との関係を案内する場所です。そして、その町や村で未来をつくっている手ごたえを関係人口の皆さんが感じられるかどうか。それからプロジェクト、その町や地域に関わることが自分事として楽しいかどうか。そして、何より仲間の存在を感じられるかどうか。長井市に仲間がいる、西条市に仲間がいると感じられる地域であればあるほど関係人口は生まれていくと思います。ご清聴、ありがとうございました。

ここからは、長井市の内谷市長、西条市の玉井市長にご登場いただいて、長井市と西条市、それぞれの市での関係人口の取り組みについてお話をいただければと思います。まずは、内谷市長お願いいたします。

山形県長井市長 内谷 重治

『～みんなで創るしあわせに暮らせるまち長井～ “地域連携の関係 人口創出拡大の取り組み” 』

山形県長井市長の内谷でございます。1部では指出さんのプレゼンはもちろんですが、添田村長、そして高橋市長の素晴らしい具体的な事例をお聞きして、本当に感心したところです。私どもは今関係人口を作ろうと色々もがいているところで、そのような視点ですが早速紹介させていただきます。(1頁)

まず私どもの長井市ですが、山形県でも南の方で隣が新潟県・福島県という地域にあります。ご覧いただいている1番最初の所はこの5月に開庁した市役所ですが、特徴がありまして、1番目の画像の右手の方、色合いが違うと思いますが、そこは山形鉄道フラワー長井線という駅でその本社が入っている、私どもで言いますと議会棟です。白い部分が市役所、全長が170メートルで、全国では初めての駅と市役所が一体となった庁舎であり駅です。ぜひ機会がありましたら私が自ら案内させていただきますので、ぜひお越しいただきたいと思います。そして、私どもの町は人口が2万7,000で、大変人口減少に苦しんでいる町です。元々、かつて江戸時代に米沢藩上杉の最上流の最上川を利用した船着き場があった町で、物流や商業の町として栄えました。大正、そして昭和の初期くらいになりますと、鉄道や陸路が整備され、戦前は郡製糸あるいは、戦時中は東芝、また戦後は協同薬品工業というJAの家庭配置薬を作る会社などを誘致し、どちらかという製造業の町として発展した所です。そうした町ですが、人口減少で町がどんどん衰退し、また先ほどの製造業3つの誘致企業も15年20年前にすべて撤退あるいは他の町に移ってしまい、15年前に約2,000人程度の雇用が失われたという大変衰退著しい町です。そこで、なんとかこの地域をもっと活性化しなければいけないということから、まずは観光で外から多くの皆さんにお越しいただいて地域の経済を少しでも潤そうと、様々な取り組みを行ってきました。(2頁)

今まで取り組んだものが2つあります。その1つがふるさと長井会で、今では都道府県ごとあるいは多くの市町村・地方の市町村がいわゆる県人会といったふるさとの人たちの会を首都圏を中心としてお持ちだと思いますが、私どもにはそういったものがなく、それで他の町が県人会やふるさとの会と交流しているのを羨ましいと思っていました。もちろん長井からも首都圏を中心に大勢の皆様が行っていますので、ぜひそうした会をなんとか作ろうとして色々な所に働きかけて、5年前にふるさと長井会を作りました。(3頁)

ただ、今までのいわゆる県人会的な地方出身の会と違う所は、単なる親睦あるいは交流の場というよりも、今苦しんでいる自分たちの生まれ育った所、または長井に関わっていた人たちがふるさとを応援しようということで作っていただいたところです。私どもは

東京都大田区と防災協定等々で連携しており、ふるさと長井会の毎月の例会や色々な部会を開催している東京事務所を都心ではなくあえて大田区蒲田に作らせていただきました。この映像の方は、そこでの交流会の様子です。(4頁)

そして下の写真では、そうした方々が長井にお越しいただき色々な企業を紹介いただいたり、自分が住んでいる首都圏の人たちを連れてきたり、そうしたことを行っていたりしております。また私どもは大田区と様々な関係を育て、ゆくゆくは関係人口につなげようとしているところで、こちらの写真では、蒲田の西口で私どものいわゆるむかで獅子、人が20人くらい入っている黒獅子で舞う出前に伺いました。あとは、子どもたちが中学校の修学旅行で長井の紹介を首都圏内でさせていただく等の交流をしています。また真ん中は、ふるさと長井会の人たちが私どもの小学校に来ていただき、色々な出前講座ということで、日本あるいは世界の話もしていただいています。さらには、一般の市民の皆様にも様々な形で交流ということで、話をさせていただいたりしております。(5頁)

今の私どもの狙いとしては、これからお話しする広域観光DMO、長井市を中心に2市3町で作っている観光DMOです。その前は単独でDMOの卵を作っていました。これは、我々行政で積極的に旅行会社の業務を行うことで長井市に外から多くの皆さんにお越しいただこうということでDMOの卵を作り、現在は発展的に広域連携のDMOになりました。ふるさと長井会の皆様から色々な方々に声をかけていただいて私どもの町に来ていただく、そこから単なる観光ではなく長井の市民の皆さんと色々な交流を持つことによってファンを増やそう、そういったことで始めました。指出さんからも紹介がありました「やまがたアルカディア観光局」についてですが、皆さんもアルカディアというのはお聞きになったことがあると思います。明治の初めにイギリスの女性旅行家でイザベラ・バードという方が日本を色々旅して、そして日本奥地、山形を中心に東北の方を周って執筆した本があります。その中で、私どもが住んでいる地域2市3町をこれは東洋のアルカディアだ、理想郷・桃源郷だと言ったことから、アルカディア観光局と名付けました。(8頁)

これは、今組織的には行政が中心にやっております。ただ、もちろん観光交流の主役は民間の皆様であり、従来の観光というと大きなホテル・観光旅館あるいはおみやげ屋さんや一部のエージェントの皆さんといった限られた人たちが潤っていたわけです。そうではなく観光で地域づくりをしようということから、まず行政で作ったのは国の地方創生の推進制度を活用しようということで、中々多額の税金を割いて観光振興に充てられないという悩みから、2市3町で年間最大2億円まで国の事業費として認めていただき、それを5年間続けられるということで、まずは私ども行政で組織を一般社団として組みました。しかし、実際は若い人たちを中心として、例えば老舗温泉旅館の若旦那はもちろん1000年続いている神社の神主さん、あるいは農家の皆さんや商店街の皆さん、ようやく新規農業として6次

産業化を始めた方など色々な方々を巻き込んで、むしろ今はそういう人たちが主役になって様々な取り組みを進めています。やまがたアルカディア観光局は、単なる旅行会社として立ち上げたのではなく、あくまでも観光で地域づくりをしていくということで、コンセプトは永遠のローカル、自分たちのこの地域を未来の子どもたちへつなぐ、それが民間の人たちが話し合っただけで作った方向性ですので、大変面白い取り組みだと思います。指出さんから色々ご助言を頂いた OMIKI プロジェクトも、最初は 2 市 2 町でしたが今は 2 市 3 町になり、それぞれの市町でたくさんある造り酒屋の若旦那などにも声をかけて、ぜひ OMIKI ということでこれを 1 つの観光商品の話題になるように、世界的アーティストの皆さんに協力いただいて斬新なラベルを作って売り出しました。これが非常に好評で、こうした行政では思いつかないようなことを若い人たちに自ら進めていただいたという例です。(9 頁)

ライク・ア・バードは、イザベラ・バードのように女性の視点からそれぞれの町の良さ、あるいは女性を中心とした若い人たちと懇談する中から地域の良さを画像で紹介しようというプロジェクトで、まだ途中ですが今第 4 弾に取りかかろうとしています。このような取り組みを続けながら、外部にはまだ積極的に発信はしていませんが、まずはインナープロモーションということで 2 市 3 町にもう少し観光交流の必要性・良さを知ってもらおうと様々な取り組みをしています。(10 頁)

元々私たち長井市はもちろんですが、米沢市と長井市、南陽市および 5 つの町は製造業の町です。先ほど述べたように製薬会社などがあり、東芝は戦後最大で 2,500 人位、ゲンゼも 1,000 人位の雇用がありました。あとは元々肥沃な土地で米がよく取れる、山の果物や米沢牛など、ものづくりを生業としているため、自分たちが楽しむのは良いが、観光交流として外の方にお越しただいておもてなしによって経済効果を狙うという発想は元々なかったため、アルカディア観光局を通じてそのような取り組みを行っているところです。(11 頁)

これからは観光局を関係案内所としてふるさと長井会とつなげ、そして他の町の県人会と連携しながら、いよいよこれから関係人口をつなげていきたいと考えています。一方、村上市長さんからあったように、受け皿としてのコミュニティセンターを活用してさまざま準備をしているところです。以上です。

指出：

内谷市長、ありがとうございます。色々なプロジェクトが今動いている最中で、これからは楽しみだと思ってお聞きしていました。また後ほど意見交換の所でお話いただければと思います。では、続いて西条市の玉井市長にお話を伺えればと思いますので、よろしくお願いたします。

愛媛県西条市長 玉井 敏久
『LOVE SAIJO なファンづくり』

皆さん、こんにちは。愛媛県西条市の市長の玉井でございます。今日のテーマである関係人口のつくり方ということで、私からは本市が取り組んでまいりました LOVE SAIJO ファンクラブを中心に活動の紹介をさせていただきたいと思います。

まだまだ具体的な成果と言えるまでには至っておらず、あくまでも 1 つの事例として聞いていただけると幸いです。最初に西条市のプロフィールを簡単にご紹介します。(1 頁)

西条市は、南は西日本最高峰の石鎚山、北には穏やかな瀬戸内海に抱かれ、豊かな自然と清らかな水の恵みに育まれた歴史と伝統が息づく町です。愛媛県の東部に位置しています。平成 16 年に 2 市 2 町が合併し、現在の西条市が誕生しています。人口は約 10 万 8,000 人です。(2 頁)

気候は、温暖で豊富な良質な自噴水うちぬきに代表されるように、大変自然豊かな町となっています。ご覧のようのうちぬきが市内に約 3,000 ヶ所で湧き出しております。市民はもちろん、遠方よりわざわざこの水をくみに来られ、人々の営みに大切な資源として使用されています。このうちぬきがあるおかげで水道料金が無料という地域もあり、そもそも水道管がないという地域もあります。そのうちぬきですけれども、全国利き水大会で 2 年連続日本一に輝いたこともあり、当然ながらとてもおいしい水となっており、飲料水、生活用水はもちろんですが農業や企業活動等の産業用水としても活用されており、本市が水の都と称されるゆえんとなっています。(3 頁)

また本市は、水の循環が感じられるアウトドアの町を目指し、アウトドア活動の促進による地域経済の活性化を推し進めています。その拠点として整備したのがモンベルアウトドアオアシス石鎚、また四国最大級の自然共生型アウトドアパークであるフォレストアドベンチャー西条など、本市の有する広大なフィールドを活用した多くのアウトドアアクティビティが楽しめます。(4 頁)

また秋には、豪華絢爛なだんじり・みこし・太鼓台が練り歩く西条まつりが開催されるなど、季節ごとに様々な行事を楽しむことができます。市民の皆さんに西条の魅力は何かと尋ねると、その多くは水と祭りと石鎚山という答えが返ってきます。これらが、本市の貴重な地域資源となっています。(5 頁)

本市も、これまで発表された他の地方都市と同様に、人口減少・少子高齢化の進展が将来

への最も大きな課題となっています。そうした中、「みんなで実現しよう持続可能な西条市」を合言葉に、移住推進ではオーダーメイド型の移住体験ツアーや生業を起こす起業型の地域おこし協力隊など子育て世代や若者世代を応援する取り組みを行い、この取り組みを積極的に情報発信しています。その結果、宝島社田舎暮らしの本「住みたい田舎ベストランキング 2021 年版」において全部門で全国 1 位を獲得することができました。ちなみにこの写真ですが、2 人は親子ではありません。先ほど申し上げた移住体験ツアーの 1 コマで、担当職員と移住検討者のお子様とのツーショットです。こうしたお客様に寄り添った密着型の対応もこのような評価につながった要因ではないかと考えています。(6 頁)

さて、ここからは、本市における関係人口のつくり方、西条市のファンづくりについて、説明します。(7 頁)

こちらは 2018 年 4 月に立ち上げました LOVE SAIJO ファンクラブの概要となっています。このファンクラブでは、市内外を問わず、西条が好きであれば誰でも無料で入会ができます。市外の人には西条市を知って好きになって欲しい、市内の人には町の魅力を再発見してもっと好きになって欲しいというコンセプトで、このファンクラブを立ち上げました。行政は、このような西条市が好きという方々を結ぶパイプ役としてホームページや SNS を活用し会員同士をつなぐ活動を行っています。例えば会員が自社商品やイベントなど広く発信したい情報を市の Facebook など PR し支援するというものです。本年 8 月末現在で個人会員が約 3,000 人、約 170 の企業団体にご入会いただいています。特に最近では、団体会員からの情報発信に加え、行政と一緒にコラボ企画を行いたいといった提案や相談も入ってきています。(8 頁)

こちらは、LOVE SAIJO 関連グッズです。ポロシャツや T シャツ、フェイスタオルに缶バッジ・トートバッグなどバラエティが豊かです。これらは、大変ありがたいことに市内のスポーツ店あるいは観光物産協会をはじめとした企業団体がすべて自主的に開発してくださったものです。この LOVE SAIJO というロゴマークは、どなたでもダウンロードを可能としていることから、このような広がりを見せていると感じています。(9 頁)

こちらは、クラレやコカ・コーラなど市内企業とのコラボ企画です。この他にも銀行や福祉施設あるいはガソリンスタンドなどでこの LOVE SAIJO ロゴ入りポロシャツを独自のユニフォームとして着用をしていただいています。また中でもユニークだったのが、LOVE SAIJO ファンクラブの会員の中で熱狂的な西城秀樹さんのファンがいて、その方の発案で、西城秀樹さん、LOVE SAIJO、LOVE 西城秀樹ということで、一周忌に合わせて市内商店街で 1 日中西城秀樹さんの楽曲を流すというイベントを開催しました。(10 頁)

また、LOVE SAIJO の活動を情報発信するために、インフルエンサーと言われる発信力の高い人たちにもお手伝いをさせていただいています。左側は、本市出身の眞鍋かをりに LOVE SAIJO 応援大使に就任いただいて以来、ご自身の SNS をはじめメディアの取材等でも PR していただいています。右側は、昨年度スタートさせていただいた LOVE SAIJO 応援特使という取り組みです。ファンクラブの会員を対象に公募を行い、一定の情報発信力を持つ方 13 名を応援特使として任命をさせていただきました。こちらの方にも自身の SNS をはじめとする様々なシーンで独自に西条市の情報発信をしていただいております。例えば本市出身の俳優の酒井貴浩さんには自身が出演する演劇で告知をしていただいたり、ラジオパーソナリティーの特使には番組内で PR をしていただくなど、それぞれの立場で活動をしていただいています。(11 頁)

そして今年度から特に力を入れているのが、市内の高校生をターゲットにファンクラブへの勧誘を積極的に行っています。最近のトピックスですが、市内の高校生が独自に立ち上げたクラウドファンディングをファンクラブを通して PR したところ、見事目標金額を達成したとの報告とお礼に来ました。高校生からのメッセージを写していますが、特に左下下段の中央部に応援ありがとうございます、有効に活用させていただきますとあります。これは、まさに我々が狙っていた効果と申しますか、我々の情報発信そのものに価値を感じていただいたことを大きな成果として我々も大変うれしく思っています。(12 頁)

さて、これまでファンクラブの内容をお話ししてきましたが、もちろん課題もあります。先ほど申し上げた通り、現在の会員は約 3,000 名を超えていますが、その半数が登録をしたまま特に活動が見られない会員となっています。こうした会員の行動変容をいかにして促し、関係人口として関わりを深めるかが課題であると考えています。本市が関係人口創出に取り組む理由は、言うまでもなく人口減少と少子高齢化対策に寄与するという考えからですが、その一方で現行水準の人口を維持することは不可能とも考えています。人口減少を前提としながらも、地域課題解決に積極的に取り組んでくれる「活動人口」、つまり定住人口に移住者や関係人口を加えた人口の考え方である活動人口が増えれば、持続可能な町として存続し続けることができると考えています。行政が一方通行で情報発信するだけではなく、個人が SNS を積極的に活用する時代においては、関係人口を巻き込んだ情報発信が大変重要であると考えています。(13 頁)

長くなりましたが、愛媛県西条市の発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。(14 頁)

指出：

玉井市長、ありがとうございます。色々な形でファンづくりに取り組まれているお姿がスライドから拝見でき非常に素晴らしいと思いました。では、ここからはおよそ 25 分、内谷市長と玉井市長と参加いただいている皆さんとの意見交換の時間にしたいと思います。まず参加いただいている皆さんにご質問いただく、もしくは発言に加わりたいという方は、カメラをオンにさせていただいてお二人の市長とお話しもできますので、お気軽にお願いします。では、内谷市長と玉井市長、改めてお互いのプレゼンをお聞きになられたの感想はいかがですか。まず、内谷市長のプレゼンをお聞きになられた玉井市長から一言コメントを頂ければと思います。

玉井市長：

課題は同じだと改めて分かりました。私たちも様々なチャレンジをしております。ふるさと長井会のご紹介をいただきましたが、私どもも同郷会というものを関東圏・関西圏ではやっていたのですが、課題としてそれが単なる飲み会・懇親会にとどまっていないかということで、それを変えていこうというのがこの LOVE SAIJO シティプロモーションになりますので、そういった所のご苦勞が非常に良く分かりました。また、そこに例えば大田区の蒲田と連携をしながらという所がひとつミソなのかなと思いつつながら、関係人口が広がっていくことを期待したいと思いました。それと観光づくりの方でも DMO を立ち上げたというお話がありましたが、私どもも今高知県の町そして大川村という日本一小さな村と石鎚山系をご縁として連携していますが大苦戦しており、ここに着地型観光ということで多くの人にこの地域を発信していきたいと思っていますので、それには情報発信が非常に大切ということも改めて知るところとなりました。いかにこの地域の魅力を発信するか。また長井市の内谷市長とも連携をさせていただきながら、また指出さんにもご紹介をいただきながら、いかに情報発信をさせていただくかということも勉強させていただいたように感じております。

指出先生：

玉井さん、ありがとうございます。内谷市長いかがですか。

内谷市長：

玉井市長のファンクラブをどんどん進化させて活動人口まで進化させようという色々な取り組みを素晴らしいと思って聞かせていただきました。特にファンクラブについて、作っておられる自治体は結構あると思いますが、そこにグッズ展開あるいは企業と一緒にコラボイベントを開催したりという工夫が素晴らしいと思います。あとは、インフルエンサーの活用というのは簡単そうで難しいと思うので、そのセンスも素晴らしいと思って聞かせていただきました。また、市内の高校生の件で、西条市くらいですと多分相当多くの高校があると思いますが、私どもの場合には義務教育までは市が色々な形で関れるものの高校に

なるとどうしても距離が出てしまう。そこを高校生自ら立ち上げたクラウドファンディングに対して市の方で陰からバックアップして応援をしてあげた、そうしたきめ細かな心遣いをなさっている点は我々も見習わなければいけないと思います。なお、幽霊会員というのはどうしても存在するため、もう 1 つアクションを起こしていただけるような会員にするためにはどうしたらいいかという点はおそらくどの市町村も同じだと思いますので、玉井市長からも色々アドバイス頂きながら、ぜひ勉強させていただければと思います。

指出先生：

お二方ありがとうございました。私は、長井市さんも西条市さんも、本当に素敵なまちづくりに取り組まれているといつも拝見しています。2つの市に共通なのは、水の循環が非常によくなされている所で、各地の取り組みを拝見する中で水の循環や地下水のマネジメントがきちんとされている所は若い人たちが行ってみて魅力をととても見つけやすい場所だと最近気づいています。人が温かいとか、野菜がおいしいとか、空気がおいしいのは、全部水循環がきちんとしている場所ですので、ローカルの魅力がきちんとあって水が豊かな町という意味で、西条市さんと長井市さんは僕の中でとても大好きな市です。

質問をさせてください。関係人口がこれから増えていくことを内谷市長も玉井市長も願われていると思います。ゆくゆくは関係人口が 5 年後 10 年後増えていく中で、自分たちの市がどうなっていけば良いか、関係人口の皆さんと地元の皆さんと一緒にどのような市を作っていきたいかというビジョンをお聞かせいただけたらと思います。内谷市長いかがでしょうか。

内谷市長：

実は私どもは昨年総務省の関係人口の事業に採択いただいて、先ほどのふるさと長井会、相模女子大、それから私どもが連携協定を結んでいる大正大学の地域創生学部と連携して、私どもは 6 地区ありますが、3 年前から教育委員会の地区公民館を市長部局にして地域づくりの拠点となるようなコミュニティセンター化を図り、今年、法人化を進めています。私どもは大変小さい町で周りの地域からどんどん人口が失われてお年寄りだけの世帯がすごく増えているので、若い人たちの発想、例えば、ある地区は文化祭に色々な若い人たちのアイデアをアドバイスして地域の皆さんと一緒に新たな文化祭を作ってもらおう、その際には自分たちの仲間や、ふるさと長井会といった人たちにも地域に入ってもらって楽しくやろうということです。また、ある地域はマルシェの様なものやっていて、地域全体で色々な自慢の農産物や特徴ある食文化なども含めてマルシェで盛り上がり、それも学生の皆さんや出身の皆様からアドバイスを頂きました。そして、そのマルシェの時に皆さんで遊びに行ってお交流を深める、このようにして、ある程度人口が減って高齢化社会がどんどん進んだとしても地域を活性化するためには、外からの関係人口の皆さんと交流することによって、また外からいらっしゃる方が地元の人とふれ合って、独特の文化風土あるいは食文化を経

験していただく。我々は小さい町ですが、この異なった 6 つの地区がそれぞれお互いに連携し協力し合いながら、これからもずっと持続可能な地域になれるような取り組みをやってきました。そして、その受け皿づくりという所についても、先ほどの村上市のような取り組みを進めながら、これから具体的にやっていきたいと考えています。

指出：

ありがとうございます。関係人口の皆さんが、長井市の皆さんとパートナーの様な形で、今後地域を盛り上げる仲間として継続的に現れて一緒にコミュニティを深めていければと感じながらお聞きしました。とても関係人口のことを理解してくださっている発言だと思います。では、玉井市長いかがでしょうか。

玉井市長：

指出さんに言っていた、例えば水の循環が良い町という話について、実は住んでいる市民の方が知らなくて外で見ていただいた方が認識して頂いている、これだけでも素晴らしいという異なる視点から物事を見てくださっている方々がまちづくりの視点からも非常に重要であり、そうしたアイデアを頂いて、私どものまちづくり事業として取り組んでいくきっかけにもなると思っています。関係人口というのは、先ほども定義がありましたように、移住者でもなく交流人口でもないという位置づけです。西条市に関わっていただくということ言うと、先ほど少し定義を申し上げましたが、人口減少を前提とした上でこの地域を維持していくためになくてはならないものと思っていますので、ここの関係人口を増やしていくことは、イコール私たち西条市の町を次世代にバトンタッチをしていくためのエネルギーであると思いますので、ここの部分は大切にしていきたいと思っています。

指出先生：

玉井市長ありがとうございます。物事を違う視点で見る人が仲間になるという点は、今おっしゃった通りで、元々あるものをどこか違う人から褒められると、まんざらでもないという気持ちになるものです。それは本当に一番大事なことで、良いものが実はこちらにあるということ、地元にいる方はずっと当たり前のもので他の人が感激したりすることで改めて自分の中で良いなと思う。このように外の力を使うという意味で関係人口は非常に良いプロモーションになるかと思います。関係人口が増えていくためには、きっと関係案内所であったり関わりしろという感覚が大切で、例えば今日、玉井市長が強さだけでなく実は苦戦している所もおっしゃってくださったので私は嬉しかった、実はそういうものが関わりしろであると思います。皆さん元々それほど強い人間ではないので、私は弱さと弱さの交換と言っていますが、お互いに困ったものを持ち寄って何かできないかということは、実は人が関わりやすい関わりしろと言われる場所や環境、気分だと思います。そうした視点でお二人にお聞きしたいのは、例えば長井市や西条市ではこんな所が関わりしろかもしれない、関係人

口の皆さんがこういう場所だったら関わりやすいかもしれないと思える所を市長お二人にお聞きしたいと思います。それはどんなものでも構いませんし、例えばおそば屋さんが今空き店舗になっているから、こういう場所で何かやってくれてうれしい等、そんな感じでいい結構ですので、具体的に、お二人が今ふと思いついた所を教えてくださいませんか。内谷市長からいかがですか。

内谷市長：

今、指出さんがおっしゃった部分は実は今一番悩んでいる所です。先ほど申し上げたように、東芝の子会社や製薬会社が街中にあっただので、20年前くらいまでは街中に飲食店やショッピングできる機能もたくさんありましたが、それが見事にこの20年から25年くらいで空き店舗にペンペン草が生えているような商店街になってしまいました。ただ、そういう空き店舗や空き家を上手く活用してもう1回中心市街地に都市機能あるいは市民の皆さんにさまざま楽しんでいただけるようなエリアにしようと色々取り組んでいます。ただ、一旦衰退した町は、その商店主の息子さんとか娘さんとかが「どうせここはダメだから」とまったく関心を無くしています。しかし、我々が進めようとしている部分を行政と民間で一緒に作ろうとしていますので、そういった所の担い手といった所で、色々なアドバイスや自分で起業・創業をするような人たちにぜひ長井市に来ていただいてアクションを起こしていただくと少し大きな刺激になって町自体も眠りから覚めるかと思っています。そういった所での関係しるを期待しています。

指出先生：

ありがとうございます。私もライク・ア・バードの取り組みの中で長井市さんにお伺いすることがありますが、元々の印刷会社をリノベーションしたアメフラシという、若いアーティストの皆さんが使っている場所があって、色々な子どもたちがそこで芸術に触れたり、地元のお父さんやお母さんが遊びに来たりして、新しい場所になっています。先ほど内谷市長がおっしゃったような関わりしるをどのような場所でも作り出せる1つの例として、若い世代が長井市でああいう場所を作っているのを見ているので、今お話を聞いて、改めてそこが重なりました。では、玉井市長いかがでしょうか。

玉井市長：

関わりしるの答えになっているかどうかわかりませんが、私どもは移住施策の中で少しニッチ的な所、地元の皆さんが中々商売・生業にしにくい所に起業型の地域おこし協力隊に入ってきてもらいました。先ほどの話とリンクしますが、こういうことにチャレンジすれば少しずつですが、スモールスタートでも商売になっていくと思います。また、関わりしるという部分では、私どもは工業都市の側面もありますが自然豊かな農業という所もありますので、そういったことで、今までの自分たちのキャリアを活かしながら外から応援をいただ

いたり、西条市にこういう魅力があるから関わってほしいという声も頂いていますので、そうした部分は西条市への関わりしろではあるかと思っています。

今始まったばかりの部分をご紹介させていただこうと思いますが、西条市は実は関西圏で販路拡大、西条市を売り込んでほしいということで大坂事務所を作っていたのですが、こちらから出て行って今度新しく大学生や**専門学生になった西条市出身者を返していく仕組みをミッションとして大坂事務所に託しました**。それも拡大型で東京なども職員が考えてくれています。そうしたことで、オンラインを使ったイベントも実施したり地元業者とも深く連携しながら関係人口の創出という所で関りを広げていく、このような取り組みをさせていただいています。もう1つとしては先ほどもご紹介させていただきました高校生、若い世代にこちらの方を振り向いてもらうための関わりしろ・関わり型情報発信といったこともしていきたいと思っています。関わりしろの取り方が違うかもしれませんが、例えば西条にお爺ちゃんやお婆ちゃんはあるけれども子どもたちは関西圏あるいは関東圏にいるという場合、孫世代にこちらからアプローチをしていくのは非常に良い関わりしろだと思います。向こうから見ても、お爺ちゃんやお婆ちゃんが住んでいた所に小さい時に行った、お爺ちゃんやお婆ちゃんの所へ行こう、帰ろう、戻ろう、こんな形になると、関係人口として見てもチャンスと思っていて、広く解釈していきたいと思っています。答えになっているかどうかわかりませんが、そのような形を考えています。

指出：

玉井市長のお話はすべて関わりしろにつながっているご発言で、最後のお孫さんの話は実は非常に重要ではないかと思っています。私が作っている関係人口の講座は、かなりの割合でその地域にお爺さんや婆さんがいる、もしくはいたという若い方が多く、興味があったので参加しましたといったUターンや孫ターンみたいな感じで、特に孫ターンの所は関係人口の1つの大きな層だと感じているので、それを今お話として頂けたのは今回のこのセッションの中でとても重要な所だと思いました。

このまま西条市の話をお聞かせいただきたいのですが、玉井市長への質問として、さきほど内谷市長もおっしゃったように、休眠人口と言いますがファンの中で動かれていない方々をどう動かしたら良いかというところが大事だと思います。その点、玉井市長はどのように1,000名くらいの方に喚起を促そうとしていらっしゃいますか。

玉井市長：

これは情報発信に尽きると思っていますが、どういうことが刺さるかという所は少し考えなくてはならないと思っています。職員と一緒に考えていきたいのですが、実は具体的な案を自分が持っているわけではなく、刺さり具合をどのようにしたらよいか。最終的に2割6割2割のような所もあるので、そうしたところでは整理をしていかななくてはならない部分もあり、その2割の分を次の所に求めていく方が早いかもしれませんので、ここは手段、戦

術をまだまだ検討します。

指出：

具体的な生のお言葉で嬉しい限りです。おそらくふるさと長井会も同じだと思います。休眠している縁のある皆さん、関係性のある皆さんに対して、内谷市長であればどのような技を使って長井市にリブートしてもらうか、教えてください。

内谷市長：

1部で村上市の高橋市長がおっしゃっていましたが、ふるさと納税で選んでもらうようなプレゼントをしたということで、多分1回ファンクラブ等に参加するにしても、例えばふるさと長井会に一度入っていただいた方はもういいという突き放した感じではなく何かつながりを持っていたいと思っている人たちだと思います。そこで、大変かもしれないですが、それほど金額が張るものではなくても、例えばコロナ禍で苦しんでいる時に地元の名産を心ばかりですがということで贈ったりした後に、ついでにふるさと納税もお願いしますというようなアプローチをするのもいいと思っています。玉井市長がおっしゃるように、いかにこちらから情報を発信していくか、色々な付き合いをこちらからお願いしていくかということに尽きるかと、答えとしては非常に平凡な答えですが、そのくらいでしょうか。

指出：

ありがとうございます。せっかくご縁があってファンになったり関係人口になっている皆さんなので、また改めてそれぞれの町の魅力などに触れる機会がさらに作れたら良いなと思いました。

あつという間の時間ですが、後5分くらいでまとめに入りたいと思いますので、私の方で僭越ながらまとめさせていただき、お二方に最後メッセージを頂けたらと思います。私はソトコトという視点から、長井市と西条市いずれも独自の取り組みをしていらっしやって、関係人口に関してはもちろんですが色々な意味で自分たちの町のことを自分事として考える首長のお二人が発信されていると常々拝見しておりました。今日のセッションで改めてお二人のプレゼンテーションをお聞きし、どこかの町と町が競い合うというよりも、それぞれの町の良さをきちんと発信できることが一番魅力が増えていくことだと思いますので、皆さんがどこの町と関わろうかという選択肢が多くなることが1番大事だなと思いました。今田舎暮らしの本であれだけの人気になられている西条市さんは、玉井市長をはじめとした皆さんの取り組みが本当にきちんと伝わっている政策になっていると感じています。それから、内谷市長をはじめとした長井市の皆さんには私も大変お世話になっていますが、とても皆さんアットホームで長井市をどうにかしていきたい、元々、好きな自分の町の愛情感溢れる取り組みをしていらっしやるので、これは関係人口がすごく興味を持つ大事な所だと思います。自分の町のことを愛情たっぷりに語る職員の方が大勢いらっしやる所

は関係人口も増えていきます。そうした意味で、関わりは感情に左右されると思いますので、西条市の取り組みは玉井市長をはじめ、長井市の取り組みは内谷市長をはじめとした皆さんの感情のこもった取り組みが、関わりを好む人たちに大変注目されているのではないかと思います。これからの発展が楽しいプレゼンテーションをありがとうございました。私もぜひ長井市と西条市の関係人口に入れてくださるようお願いいたします。では、一言ずつになってしまうかもしれませんが、お二人から最後にメッセージを頂ければと思います。プレゼンの順番で内谷市長からお願いします。

内谷市長：

私たち長井市は、関係人口づくりについてはようやく途に就いたばかりでございます。先ほど指出さんからもありましたように、私どもだけではなく、アルカディア観光局のように、同じ1つの地域として1回きりではなく何回も何回も、今回はここで次の隣の町でその次はむこうの町だということで連携しながら幅広い関係が作れるような、そんな取り組みを目指して頑張っていきたいと思っています。これからも、よろしくご指導をお願いしたいと思っています。ありがとうございました。

指出：

内谷市長、ありがとうございました。では、玉井市長よろしくお願ひいたします。

玉井市長：

参りました。内谷市長が言われたことは、そのまま私の想いという話です。実は、私どもは職員に、勝ち残る町を目指せと言っています。この勝ち残る町というのは、部分最適ではないと思っていまして、私たちが仮に一步先を歩いたとしても、今度は全体最適を目指していかなくてはこの地域が向上する地域の活性化につながらないと思っております。例えば隣町の町でもそういう取り組みをするということで全体最適になった時に、ひよっとするこの関係人口が色々な所で周遊・周回する・循環する、こうしたことにつながって、地域の底上げにつながるかと思っていますので、職員向けにはそのようなことを言っています。もしかすると全体最適を目指していくことが関係人口の増につながるのではないかということをお話を今日、指出さんの話や市長の話を聞いていて思いついたので、ここで発言させていただきます。いずれにしても、地域全体の底上げのために、西条市が1歩前を歩けるように頑張っていきたいと思っています。以上です。

指出先生：

玉井市長ありがとうございました。ここでお話をさせていただいたものが共有知となって玉井市長の今のご発言になったということがこの分科会の大事な所ではないかと思ひました。国土交通省の試算では、関係人口は1,800万人以上いるという話ですので、全体最適

を皆で考える時に心強い数字ではないかなと僕は思っています。改めて、このような楽しいセッションをプレゼンテーションとともにご発言いただいた玉井市長、内谷市長、本当にありがとうございました。これで分科会、関係人口のつくり方第3分科会の第2部は終わりにしたいと思います。皆さん、ご参加いただきましてありがとうございました。事務局に戻させていただきます。

司会：

指出先生、内谷市長、玉井市長ありがとうございました。以上をもちまして、第3分科会、関係人口のつくり方の第2部を閉会とさせていただきます。本日は、地域力の強化に向けた全国市町村長サミット2021 in 福島にご参加いただき、誠にありがとうございました。